

就寝分離と意識形成との関連

住空間の分析 (5)

大妻女大家政 尾上孝一

目的 今日、住居計画に際しての重要な考え方となっている就寝分離と人間の意識行動の発達との関連を検索しようとするものである。いわゆる、今日の住生活の水準は、食寝分離と就寝分離(性別就寝)の考え方のもとに年々質的向上がはかられている。そして、住居の設計にての子供室の計画について、個室確保(個室就寝)の時期と子供の知的行動の発達段階との関連は、どのようにかかわりあっているかを考察しその概要を報告する。

方法 調査方法は、質問紙法を採用し次の二つに大別し、それぞれの関連を検討した。

(1) 各時期と就寝タイプとの関連 子供の成長に伴う各時期(小学校低学年、小学校高学年、中学生、高校生、短大生)にての就寝タイプ、きょうだい他との就寝状況など。

(2) 成長に伴う各時期と意識形成との関連 調査項目に提示された意識行動の事項について、それがいつ頃から自分自身に意識されながらはっきりした生活行動となっておられてきたかを調査する。調査概要 本学短大1・2年生、配布数710枚(内有効645枚)

調査年月 昭和57年7月

結果 1) "子供の就寝分離または個室化がその時期を含め、その性格形成に如何なる影響を与えるかは(後略)のテーマについては、意識行動の事項との関連をみる限りその類型を把握することができよう。2) 子供室の確保のしかたは、各家庭の経済事情に大きく左右されるが、子供の性格に応じて確保すべき時期の推定なども一考するための設計手法の各種要因をよりの確に抽出し検討してゆく必要がある。

* 山岸・平野・宮家編著：生活の学としての社会学，総合労働研究所，P.121，1982